

序

「環境変化とインダス文明」プロジェクト（略称：インダス・プロジェクト）は2007年度に本研究がスタートしました。本研究のスタートにあわせて、大西正幸さん（プロジェクト上級研究員）、上杉彰紀さん（プロジェクト研究員）、寺村裕史さん（プロジェクト研究員）、園田建さん（プロジェクト研究支援員）の4名が新たに総合地球環境学研究所（以下、地球研）のインダス・プロジェクトに着任しました。これを機に、2007年度の活動報告として、年報を出版することになりました。この年報にはそれぞれの研究グループの活動報告やプロジェクトに関わる研究報告、そしてニュースレターとしてインターネット発信した記事を掲載しております。

これまでのインダス・プロジェクトの経緯を略述しておきます。インダス・プロジェクトは2003年度に長田の地球研着任によって始まりました。当初は「言語学的手法による古代文明の環境復元とその総合的検証ーインダス文明を例として」という名称で、IS（インキュベーション研究）をスタートしました。2004年度には「言語学的手法」という限定的な方法論を前面に出すことへの疑問が呈されたため、名称を「古代文明の環境復元の試みーインダス文明を例として」とかえ、FS（フィージビリティ研究）を行いました。そのFSをうけて、2005年3月に評価委員会の審査がありましたが、言語学的手法に対する問題点や5年という期間での研究計画の妥当性などが指摘され、PR（プレリサーチ）には進めませんでした。

そこで、評価委員会の指摘にしたがって、2005年度のFS2年目から名称を「環境変化とインダス文明」に変更するとともに、環境変化のデータ収集を中心的な課題として研究計画を一から練り直しました。とくに、古環境復元に関して広島大学の前杵英明助教授（当時）がコアメンバーを引き受けてくださり、古環境復元という評価委員会が要請している研究をプロジェクトに取り込むことができました。この場を借りて、前杵さんに御礼を述べておきます。

その一方で、それまでプロジェクトに参加していただいていた、とくに言語学を専門とするメンバーをプロジェクトからはずすことを余儀なくされ、ご協力くださっていた皆様に多大なご迷惑をおかけすることになりました。ここで今一度お詫び申し上げたいと思います。

2006年2月には、これまでの旧春日小学校跡地での仮住まいから、上賀茂にある新しい研究所に移転しました。その引っ越しの後かたづけも終わらないうちに、ふたたび評価委員会に臨みました。その年の評価委員会においても、言語学研究者が古環境復元を行うことがはたして可能なのか等々、大変厳しい評価もありましたが、何とかPRに進むことができました。そして、2006年度には森若葉さんをプロジェクト上級研究員として迎えるとともに、フィンランドからA. パルポラ教授を招聘外国人研究員としてお迎えし、新しい地球研でのインダス・プロジェクトをスタートすることができ、今日に至っております。

2007年度には、日高所長から立本所長に代わるとともに、文明環境史領域プログラムがはじまり、インダス・プロジェクトはその文明環境史領域プログラムに属することになりました。ISやFSの段階において、本プロジェクトが環境問題のテーマにそぐわないとの指摘を何度も受けてきましたが、このプログラムによって、インダス・プロジェクトの地球研での位置づけが明らかになったように思います。

プロジェクトでは、古環境、生業、物質文化、伝承文化（インド学・言語学）の4つの研究

グループにわかれ研究を続けています。今回の年報では、それぞれの研究グループのチーフを務めるコアメンバーが研究活動を報告しております。また、実際に研究活動を行った時点で書かれたニュースレターでの報告も掲載しておりますので、詳細はそちらをご覧ください。

ここで、2006年11月に参加したトルクメニスタンでの国際シンポや2007年10月に行ったイランでの遺跡訪問などを取り上げて、本プロジェクトにおける国際的な研究者ネットワークの構築状況について、少し述べておきます。

2006年11月に、その当時地球研に滞在しておられたパルボラ教授に誘われて、トルクメニスタンに行ってきました。そこで行われた国際シンポジウムにおいて、ケンブリッジ大学のレンフルー教授、ペンシルヴァニア大学のポセール教授、ライデン大学のルボツキー教授、クイーン大学のマロリー教授といった著名な研究者に直接会って、いろいろとお話をうかがうことができました。また、インダス印章が見つかったゴヌール遺跡の視察やトルクメニスタンでの発掘された品々を博物館でつぶさに観察することもできました。世界の第一線で活躍する考古学者や文献学者との交流の機会を得たことは、われわれのプロジェクトにとって、大変有意義なものとなりました。現在、プロジェクトで出版している *Occasional Paper* には世界各地からの投稿があります。これは、こうした世界的な研究者ネットワークを構築してきたおかげであると、自負しているところです。

また、2007年10月にインダス文明と同時代のイランの遺跡を訪ねました。その際にも、インダス川流域だけにとらわれるのではなく、もう少し大きな視野でインダス文明を見つめ直すことの重要性を認識することができました。とくに、インダス文明と同時期あるいはそれ以前の遺跡である、ジーロフト遺跡やシャフリ・ソフタ遺跡を視察できたことや、その出土品をイランの国立博物館で写真撮影できたことは特筆すべきできごとでした。イランで発掘活動をおこなっている研究者との交流は、その後2008年6月に国際シンポジウムとして結実しました。研究グループの活動だけではなく、それをプラスアルファとして生かせるだけの研究者との交流やそうした研究者ネットワークによってもたらされる最新の研究成果を把握することが、リーダーに課せられた責務だと感じております。

プロジェクトは現在本研究2年目です。このまま進めば、あと3年半続きます。今後とも皆様方のご支援ご協力を賜り、すばらしい研究成果をあげられるよう精進し続ける所存です。

最後になりましたが、本年報の出版にご尽力くださったプロジェクトメンバーの方々に深く御礼申し上げます。

長田 俊樹

2008年11月